

# ウクライナ難民に医療支援

ウクライナから逃れてきた難民にハンガリーで医療支援を行う、日本の国際医療ボランティア団体「AMD A」。仮設診療所でハンガリーの医師らとともに24時間体制で活動しています。医師の佐藤拓史さん(57)は、設備の整わない環境でも適切な治療を受けられるようにと、診療にあたっています。(小林圭子)

## ハンガリーで日本チーム

ウクライナとの国境の村  
ベレグスラーニー。仮設診

### ストレスや疲労

療所は、国境から1キほど離れた避難所の一角に、コソテナでつくられています。ここへ来る難民は徒歩で国境を越えてきます。ポランティアが、24時間難民を受け入れ、食事や寝る場所を提供。診療所も24時間体制で、救急隊も待機しています。

過度のストレスや歩いて避難してきたことによる症状が多く見られるといいます。高血圧などの持病の悪化、気管支炎や脱水症状、腹痛や下痢などの症状です。足を撃たれ、つえをつきながら「痛みが強い」と訪れた人も。弾は取り除かれていましたが、十分な処置がされていなかったため、感染対策の治療をしたといいます。

佐藤さんは「元氣そうに見えてもストレスと疲労に起因すると思われる症状が多く見られる。そこに重い病気が隠れていないかを適切に診断し、重症化を防ぐことが重要です。必要に応じて救急隊と連携できるようになっています」。

# 仮設診療所で24時間

発熱などの症状がある人には新型コロナウイルス感染症の抗原検査をしています。避難所では今のところ目立った感染はないといいます。

### スマホ使い通訳

国内外で災害の医療支援を行ってきた佐藤さん。携帯用超音波検査機(エコー)を持参し、喜ばれたといいます。

診療所にはハンガリーの臨床心理士が常駐し、難民が話したいときにいつでも

避難所で巡回診察中に、泣いていた子どもに声をかけるAMD Aの医療チーム。3月28日、ベレグスラーニー(AMD A・TICO提供)

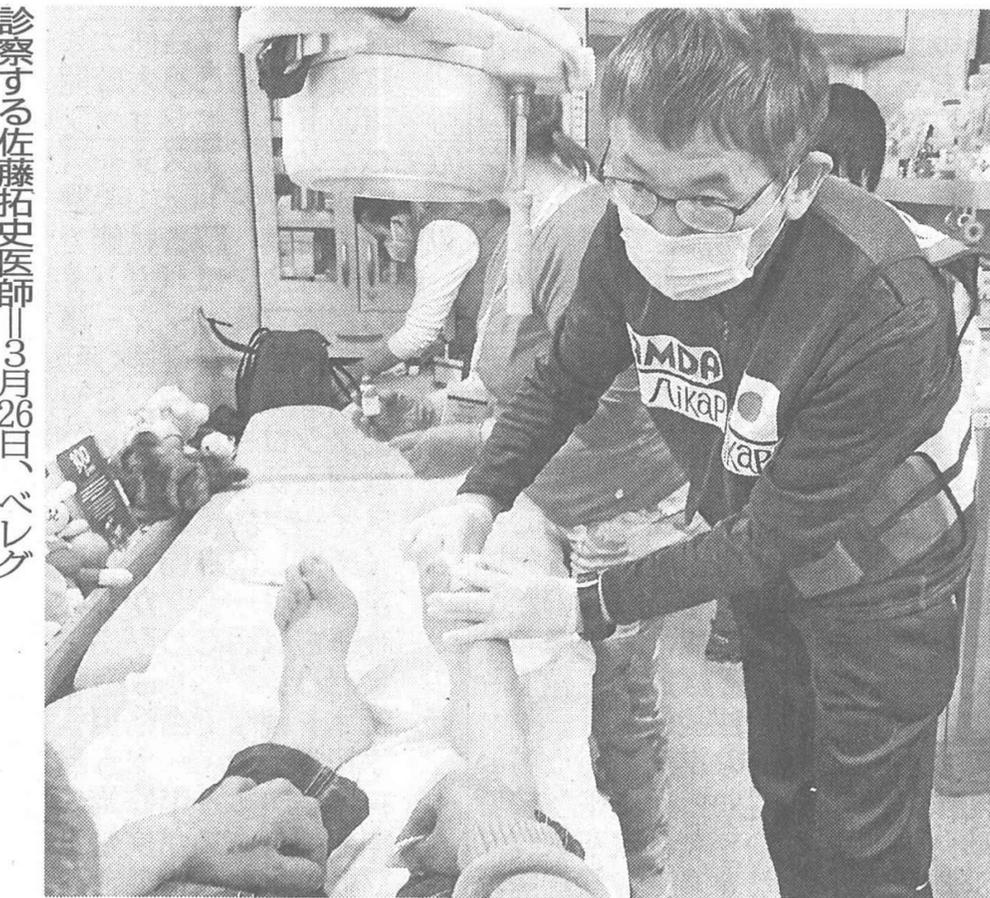


話ができる体制にしています。「避難者の中には話をしたくないという人もいれば、写真を見せて話をしてくれる人もいます。話すことは思い出すことにもなりとてもデリケートな問題で

す。避難者が話したいときに聞くことを大切にしています」  
診療所を出て巡回診察していると話しかけてくる避難者も。佐藤さんは「通訳者を呼ぶ時間ももったいないので、スマホの翻訳機能を使ってコミュニケーションをとることもあります。意外にそれでもコミュニケーションができます」と笑います。

医薬品については、「この診療所では今のところ足りていますが、長期化した場合や状況次第でどうなるか分かりません」。駅にある別の仮設診療所では、ウクライナ人の医師が定期的な列車でウクライナへ診療に出向き、医薬品を届けています。しかし、ウクライナからの要請分には全て応えられず不足している状況だといいます。

佐藤さんは今後の支援についてこう語ります。「とにかく逃れてきた人たちは急な環境の変化にさらされています。その人たちに必要な医薬品や医療が今一番求められています。長期化すれば求められる支援も違ってきます。その時とときで『今』必要なことを検討しながら、持続的に支援していきたい」



診察する佐藤拓史医師。3月26日、ベレグスラーニー(AMD A・TICO提供)

